

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2019年 10月 18日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 防災研究所

職 名・学 年 日本学術振興会特別研究員(CPD)

氏 名 大門 大朗

助 成 の 種 類	令和元年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	国際総合防災学会第10回大会		
発 表 形 式	<input type="checkbox"/> 招 待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発 表 題 目	Essay on the Debt: Constructing "a circuit of affirming debt" following a disaster in Japan		
開 催 場 所	フランス・ニース、会場:Centre Universitaire Méditerranéen (CUM)		
渡 航 期 間	2019年 10月 13日 ~ 2019年 10月 19日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(発表スライド)		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券代:	183,210円
		宿泊費:	80,500円
		滞在費:	33,400円
		交通費(関空⇄京都大):	4,660円
学会費:	45,133円		
	以上、346,903円のうち、300,000円を充当		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団の支援により、国際学会での研究成果の発表の機会をいただけたとともに、国際的なネットワーク・人脈を形成することもできました。通常の海外出張をする上で、金銭的な面だけでなく、煩雑な事務手続きが不要であることで、より成果発表のための準備の時間に充てることができました。まずは、ここに記して感謝申し上げます。誠にありがとうございました。		

成果の概要 / 大門大朗

1. 国際会議の概要

国際会議名 : The 10th Annual Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management (IDRiM 2019) (国際総合防災学会第10回大会)

渡航先 : Centre Universitaire Méditerranéen (CUM) (フランス・ニース)

渡航期間 : 2019年10月13日～10月19日

派遣学会である「IDRiM 2019 (国際総合防災学会)」は、自然科学と社会科学、多様な国・文化の融合から、総合的な災害研究の向上を目的として組織された学会です。本年も工学、経済学、情報学、社会学など文理問わず多様な分野から、世界23カ国、240名の災害を専門とする専門家、および実践者・政策決定者らが参加しました。なお、本年の第10回大会は、「Smart」をテーマに、災害に対して、知識基盤社会と経済、持続可能な成長、社会的包摂を融合させることを本大会の目的に据え、開催されました。

2. 得られた成果

行った発表の内容

タイトル : 「負債のための試論 : 日本における災害後の「負債の肯定回路」構築に向けて

(Essay on the Debt: Constructing “a circuit of affirming debt” following a disaster in Japan)

発表形式 : 口頭発表 (Regular short presentation)

本研究は、日本国内における災害後の支援行動を、支援を与える側(支援者)の側面からではなく、支援を受け取る側(被災者)の視点から、災害時の支援のあり方を捉え直し、「負債(負目)」という概念を導入することで新たなボランティアの理論を提示することでした。この「負債」から見える被災者支援の実践を、2016年の熊本地震後の被災地のフィールド研究から考察し、(1)「負債の否定回路」と(2)「負債の肯定回路」という2種類の異なった実践として分類しました。この2つをまとめ、これまでの支援枠組みが被災者に直接「負債」を負わせないようにする回路を構築するもの(負債の否定回路)であったのに対し、支援されることの負目(負債感)が全面化する大規模災害においては、負債を引き受けながらも返済する回路を生成する「負債の肯定回路」を構築していく必要があることを示しました。さらに、ボランティア、ケア、寄付、開発などで見過ごされがちな、助けられる側が、将来助ける側へ参入していくための具体的な概念としての「負債」を提示することで、一方向の支援になりがちな国際的な議論に批判的に応答しました。

国際研究集会参加の成果

本学会での成果は、大きく分けて2点に分けられます。第一に、発表後の質疑応答やその後のインフォーマルな場面でのやり取りで得られた知見や人脈です。第二に、他の発表への参加や議論を通して得られた知見です。

第一の成果は、発表後、多くの方から関心を持っていただき、質疑応答を通して新たな視点を得ることができたことです。まず、助けられる側(被災者=受贈者)を「将来助ける側へと参入する可能性のあるアクターとして扱おうではないか」という本発表の提案に対して、好意的な応答がなされたことです。こ

の提案は、受贈者が置かれた現行の不平等を追認する可能性も秘めた両義的なニュアンスを含んでいます。そのため、ネガティブに受け取られることも想定していましたが、質疑応答の好意的な意見からは、同じ問題意識を共有する人が少なからずいることを確認することができました。しかしながら、支援で受けた「負債（負目）の感覚」を通して支援の理論を転換しようと図る申請者らの提案は、普遍的な感覚として概念化するために、他の概念も検討するべきではないか、という批判も受けました。例えば、フランス人研究者からは、「負債 *debt*」というよりも、「連帯 *Solidarity*」のほうが、フランスにおいて重要視されているのではないかと、いったものです。いずれの批判も、国際的な比較研究が必要という意味での好意的なコメントであり、今後の研究の方向性を考える上でも、重要な示唆を得られました。また、議論を行う中で、ヨーロッパ系の研究者数名ともより踏み込んだ関係を構築でき、今後の研究における人脈形成という意味でも、良い成果が得られたと考えています。

第二の成果は、今回の学会の大きなテーマである「*Smart*」という点に関連した災害や防災の知見です。災害は、学際的なアプローチの必要である研究対象であることは当然のこととして理解しているつもりですが、申請者の専門は人間科学（社会心理学）であることから、科学技術（テクノロジー）や政策、国際機関の動向などは十分に追えていなかったため、大変参考になる発表がいくつもありました。例えば、フランスの政府機関からは、フランスで取り組まれているセキュリティや空に関する技術（ドローンや飛行機、サテライト等）、3D でリスクをビジュアル化できる CEMER という技術についての発表がありました。他にも、国連機関からは UNDDR（国連防災機関）のインクルーシブな防災の取り組み、UNESCO の社会インフラと建築インフラ構築の成果などを知ることができました。また、研究者からも、大きなイベント時のテロや事故避難のための避難アプリ（例えば、KATWARN）など、自然災害以外の知見も取り入れることができました。このように、近年の人工知能やビッグデータの発達に伴う「*Smart*」な防災実践には、単に、科学技術の導入だけでなく、複数の組織との連携、住民と組織との関係構築、社会システムと技術の融合など、申請者の分野との協同の中で行うべき災害実践が多数存在することに気付かされました。

総合的に見れば、災害という枠組みの中でも、分野の違い、対象となる災害の違いなどを超えて、多様な議論が展開されるなかで、自分の研究をより広範な防災という視点から捉え直すことができました。一方で、災害という共通の研究対象に対して、共通のディシプリンが存在しているという段階にまでは至っておらず、今後われわれ世代が将来の防災を考えるにあたって、さらなる議論を行っていく必要があるとも感じました。

3. 反映させた研究発表など

なお、本海外派遣を受け、以下の研究においてその知見を反映させ、発表いたしました。

大門大朗・渥美公秀（2019.10.20）. 「「負債」を通じた新たな災害ボランティア論の構築」『日本グループ・ダイナミックス学会第 65 回大会』. 富山大学, 富山. （査読なし・口頭）

4. 謝辞

最後になりましたが、本補助金に採択していただいた京都大学教育研究振興財団の関係者のみなさまには深くお礼を申し上げます。本学会を通じ得られた経験・知見をもとに、なお一層の研究活動に励んでまいりたいと思います。誠にありがとうございました。